

その先へ

共に進もう!「今」を、そして「未来」へ



AIDS

文化フォーラム

in 陸前高田 2013 報告書 

「はまってけらいん かだってけらいん」

(はまって=加わり一緒になって かだって=(語)お話をする)

<目次>

- ◆1. 開会式 ……P4
 - ◆2. オープニングライブ ……P6
 - ◆3. トークセッション ……P7
 - ◆4. HIV/AIDSミニ講座 ……P16
 - ◆5. 特別講演「夜回り先生 いのちの授業」 ……P20
 - ◆6. 閉会挨拶 ……P24
 - ◆7. HIV即日検査 ……P24
 - ◆8. 気仙地域の、 ……P25
- これまでのエイズ予防普及啓発事業
- ◆9. イベントはまかだ団体 ……P26
 - ◆10. マスメディア紹介 ……P36
 - ◆11. アンケート ……P37



「はまってけらいん、かだってけらいん運動」は、日常生活の中(食卓、買い物、井戸端会議、病院の待合室など)のあらゆる場面やイベントなど、人が集まる機会に、はまって(集まって・加わり一緒になって)かだる(語る・話をする)ことを目指しています。この実現のために、特別な場所ではなく、人が集うさまざまな場面で、人の輪の中にはまり、かだるということが自然と生み出される場づくりを目指し、そのことが「大切な、大事なこと」と市民の皆さんで共有できるようにしていきたいと考えています。

(「広報りくぜんたかた」より抜粋参考：公衆衛生ネット<http://www.koshu-eisei.net/saigai/20121201kouhou.pdf>)



1.開会式

「復興加速年」 オール岩手による復興に全力

岩手県大船渡保健所長 杉江 琢美

東日本大震災から2年8ヶ月が経過いたしました。

岩手県では本年度を「復興加速年」と位置づけ、オール岩手による復興に全力で取り組んでいるところです。

エイズの啓発イベントを平成17年度から、陸前高田青年会議所、陸前高田市、大船渡保健所が一体となって、継続してきたところですが、震災により中断を余儀なくされたイベントを今年度、関係者の熱意により復活させることが出来ました。

「その先へ～共に進もう！「今」を、そして「未来」へ～」をテーマとし、エイズへの理解を深めるとともに、出会いと語らいを通して繋がりながら共に進んでいこうというメッセージを込めて開催するものです。

最後まで御参加くださいますようお願い申し上げます。



AIDS文化フォーラム in陸前高田

岩手医科大学いわて東北メディカル・メガバンク機構 臨床研究・疫学研究部門
特命助教 佐々木 亮平

みなさま、本日はお集まりいただきありがとうございます。

この事業を振り返りますと、震災前、陸前高田青年会議所、岩手県大船渡保健所、陸前高田市が協働で6年間続いていたところまで遡ります。切り口としてはAIDSですが、人と人とのつながりを考える、そして、そのことを行政や専門機関から発信するのではなく、ここに住んでいる高校生や大学生の視点から伝えていくということをいろんな人と一緒に考えながら進めていました。

3.11があり、3年間途絶えていましたが、昨年の陸前高田災害FMで、陸前高田青年会議所の理事長も務められ、この事業のキッカケをつくってくださった柴田見さんとの会話から、再び復活させようということになり今日を迎えることができました。

震災前、大江さんや岩室先生、北山翔子さんを陸前高田にお迎えしながら毎年、手作りで進んでいました。そこから今日このあとライブをしてくださる当時高校生だった金野兄妹が「ぼくらにできること」という素晴らしいテーマソングをつくっていただきました。そして震災後、AIDS文化フォーラムin横浜、そして京都とつながり、今日の陸前高田となっております。

今思えば、「はまってけらいん、かだってけらいん」を震災前から行っていたのではないかと思います。今日がみなさんにとって元気となる一日になりますように、どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。



「ノーマライゼーションという言葉が いらぬ陸前高田市を指して」

陸前高田市長 戸羽 太

お集まりいただきありがとうございます。

旗に書かれている「はまってけらいん かだつてけらいん」とは標準語に直すと「はまってけらっせ かだつてけらっせ」。集まろう、語り合おうということです。

3.11東日本大震災で亡くなられた人たちや御家族友人を亡くされた方々へ我々は何ができるんだろうって、いつも考えます。まずはその人たちを忘れないことと、もう一つは陸前高田という街を、震災の前よりもいい街にして、残念な思いで亡くなっていった人たちの気持ちにどう応えられるかなあっていつも思います。

見た目がカッコいいとか、便利になったっということも大事ですが、それ以上に、“ノーマライゼーションという言葉の必要のない陸前高田市”を目指しています。障がいをもった方でも、おじいちゃんおばあちゃんでも、みんな笑顔になれる。根本的に人間はみんな等しく生きる権利もあるし、みんな仲間だっていうところをこの街で実現させたい。偏見とか、差別とか、そういうのが無い街ができたなら、きっと天国にいるみんなも「よくやってくれた」って言うてくれるんだろうなって、私は真剣に思うんですね。

お集まりいただいたみなさま、最後まではまってかだつてお付き合いください。ありがとうございました。



AIDS文化フォーラム in京都の大野先生が仲介となって、復興への思いを込めて京都で集められた募金が陸前高田市へ贈られました



2. オープニングライブ Funny Pig (まっと&モサwith 政吾)

陸前高田市米崎町出身3きょうだい!

約30分のFunny Pigによるオープニングライブを開催!

エイズ、復興、いのち・・・おもいの込められた曲の数々に会場は飲み込まれました。

参加者からは「ぼくらにできること」の詞がよかった」との感想も聞かれました。

AIDS文化フォーラム in陸前高田テーマソング

ぼくらにできること 作詞・作曲 金野政利・美奈

- 1 自分を守ることが 誰かを傷つけることじゃないと知り
自分を守ること 誰かが去っていくんじゃないと知った
「愛」という言葉に縛られて 自分を見失っていく
大丈夫 ボクもワタシもそうだった



※ { ぼくらにできること ただ「理解する」こと
ぼくらにできること ただ「伝える」こと
そしてたくさんの仲間と「集う」こと・・・赤いリボンつけて

- 2 愛の形は様々で 正しい答えはないと知った
限られた時間だからこそ 今を大事にできると知った
次の恋 その次の出会いがあったとしても
君はもう傷つかない 傷つけないよ

※ 繰り返し

- 3 大の大人は遠すぎて 別の世界とってる
学んだボクらは少しでも 仲間を守りたいを思ってる
ボクらが動くのは 小さな「架け橋」になりたいだけ
手をつなごう 表も裏も愛は愛

※ 繰り返し

大切な人に歌うこと ぼくらにできること



作詞・作曲してくれた金野兄妹は2007年に岩室紳也先生の講演を聴いたときに感じたそのおもいを「ぼくらにできること」として、ひとつの歌にしてくれました。



3.トークセッション

「はまってけらいん、かだってけらいん」

コーディネーター ◎地域医療振興協会 ヘルスプロモーション研究センター長 岩室紳也

出演者 ◎「神様がくれたHIV」著者 北山 翔子

◎陸前高田市市長 戸羽 太

◎陸前高田青年会議所理事長 石川 浩行

◎岩手医科大学いわて東北メディカル・メガバンク機構
臨床研究・疫学研究部門 特命助教 佐々木 亮平

【岩室】 こんにちは。地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センターの岩室といいます。このイベントが始まったきっかけは私と亮平さんとの出会いだっただかなというので、まず佐々木亮平さん、自己紹介よろしくお願ひします。

【佐々木】 皆さんこんにちは。今日はよろしくお願ひいたします。岩室先生が Condom の達人ということはご存知でしょうか。「昼間から何を言うんだ」と思うかもしれませんが、そのつながりが最初のきっかけでした。

【岩室】 彼は私のAIDSの研修会に出ていたんですよ。その時の何か印象に残ってます？

【佐々木】 岩室先生は泌尿器科医ですから「この会場で包茎の人は手を挙げてください」って。

【岩室】 ちょっと包茎の人、手挙げていただけます？いないですね、1人しか。その時に彼が手を挙げたもんだから、僕の「おちんちん」っていうパンフレットをあげたんですよ。で、そこでつながったんです。

【佐々木】 包茎つながりです（笑）

【岩室】 その包茎だけだとそれ以上つながらないんですけど、私のホームページ見たことがない人は後でぜひ Condom の達人で検索してみてください。それで検索したらなんと未来型 Condom の達人がヒットしたんですよ。クリックしたら当時岩手県久慈保健所にいた佐々木亮平さんにつながって、思わず電話したんです。何であんなの使ってたんですか？

【佐々木】 私には未来があると思って。

【岩室】 じゃ俺には未来はないのか（笑）その未来型 Condom の達人が捕まえたのが隣の戸羽さんなんですよ。どこで捕まえたんですか？つながったんですか？

【佐々木】 平成17年の3月だったんですけども、当時私の上司だった今野さんが青年会議所で企画したAIDSの勉強会に行く予定だったんです。これが急きょ行けなくなって、私が Condom のつけ方講座を、まずは大人からしっかりやりましよう、やってしまった、そこが始まりですね。

【岩室】 その時に、今市長になられた戸羽さんはどんな感じでしたか？

【戸羽】 亮平さんの講義を受けまして、女性の会員もいるところで Condom とかそういう話をされたので「うわ、すごい人がいるもんだ」と思いました。暖簾分けはいらないですけどね（笑）

【岩室】 それでつながって、石川理事長、青年会議所の理事長さんでいらっしゃるわけですよ。

【石川】 はい、今年度理事長をしておりますけども、亮平さんが最初に講師として来ていただいた時は、青年会議所に入って2年目か3年目くらいだったんですよ。講演会でお話を聞いて「この人すごいな」と思って、後になって付き合いが多少あるようになったら、同い年だったんですよ。「エライ同い年」だなど（笑）



岩室 紳也 先生





佐々木 亮平先生

【岩室】それがよくこうやってつながりましたね。

【佐々木】その時に、今日の会場にもおいでの柴田見さんという方が「ぜひこの高田でできることがないか」って言うてくださったんです。その声があればJCさんと、まさか保健所と一緒にやるなんて。

【石川】そうですね。私たちのエリアっていうのが陸前高田市と住田町になるんです。市をさらに飛び越えて大船渡の保健所とつながるっていうことはそれまでもそんなになかったので、不思議な縁ができたなと思いましたね。

【岩室】でもそうやって、コンドームっていうちょっと刺激的な達人になっても、AIDSに取り組もうと、普通思わないですよ。

【石川】そうですね。当時、新聞やメディアとかでAIDSの方が増えてると。岩手県内でも当時増えていたと。でも私たちはあまり知らないと。まず青年会議所のメンバーだけで勉強会しようよ、という形で保健所さんをお願いした。その時に、亮平さんが来たと。

【岩室】なるほど。戸羽さんにとってのAIDSっていうのは何なんですか？

【戸羽】私にとってこの病気との出会いは、私若い

時にアメリカに行っていて、NBA、バスケットボールのプロのリーグがあるんですが、そこにマジックジョンソンという非常に有名な選手がいらっしゃって、その方がHIVに感染をしたという、非常にショッキングなニュースがあったんですね。アメリカ人の方々は、だからってマジックジョンソンがどうのこうのという話ではないですね。でも日本の場合、そういう病気になってしまうと、少し距離を置かなきゃっていうようなことになってしまう。そこら辺の感覚の違いが私にとっては非常にショッキングだったし、「何でだろうな？日本っていう国は」っていう思いはありましたね。

【岩室】じゃそういうAIDSを勉強しようという声が上がってきた時は大賛成って感じでした？

【戸羽】そうですね。ですから知識を得て、もちろん自分たちが感染しないってこともありますが、もし身近な方々が感染したとしても、仲間としてどんなふうにしていけばいいのか、あるいは他の人たちの偏見をどうやって外していったらいいのかっていうことになるんだと思うんですね。

【岩室】僕は今でこそHIVの患者さんも診て、この間で116人目の方が来られたと。最初の頃は、何か自分の中でもよくわかってなかった。衝撃的だったのは、初めてHIVを持った人と握手したんですよ。握手した瞬間、完璧パニックでしたね、私。よく考えてみたら、そんなことでうつるはずがない、ってわかった時にパニックになった自分を語るようになって、HIVがもっと身近なものになってきた。知識だけじゃ役に立たないっていうことを、身をもって語ってくれるのが、実は最後に紹介する北山翔子さんです。拍手でお迎えください。

【北山】（拍手）皆さんこんにちは。北山です。よろしくお願いします。

【岩室】北山翔子さんは、実は身体の中にHIV持ってるんですよ。どこで感染したんですって？

【北山】アフリカですね、恐らく。

【岩室】恐らくっていうか、恋人から。

【北山】そうですね、はい。

【岩室】何でコンドームをつけなかったんですか？っていう話になっちゃうんですよ。



【北山】彼は大丈夫だって思ったんです。彼は遊び人とかでもなくて、普通の青年だったんですね。私のことをすごく大事にしてくれて「こんな人が感染してるはずがない」って私は思った。しかも恋人だし。疑いたくないじゃないですか。

【岩室】今ここにいらっしゃる方で、お子さん作る時にAIDS検査受けてから作ったって方どのくらいいます？ほとんどいないんですよ。皆さん他人ごとなんですよ。

【北山】私はわからなかったです。自分がこういう身になって初めて「こういう病気だったんだ」って思いましたね。

【岩室】その北山翔子さんを亮平さんとかJCが陸前高田に呼んだんですよ。

【佐々木】5年前ですね。

【北山】そう、5年ぶりです、お久しぶりです皆さん。（拍手）

【岩室】実は朝、新しく建ったキャピタルホテル1000に行かせてもらって、すごく天気が良くて、風が気持ちよくて、本当にこの気持ちよさだなあっていうのを思い出しながら北山さんと、残念ながら無くなってしまった街並みを見てたんですけど、どうでした？

【北山】本当にこの空気とかお天気とか空の色とかを見ると、5年前に来てすごくいい所だなんて思って、人も優しいしね、いい所だなんて。景色は全然違うけれども、この空気感っていうの全然変わってないなって思いました。

【岩室】空気も人も変わってないですよ。でも、このイベントってAIDSのイベントじゃなくて、人と人がつながるイベントにしようと思ったのは、亮平さん何でだったんですか？

【佐々木】感染症っていうのは人を通じてつながるものなので、「人と人との間に起きるんだよ」ということを言ってたんですよ。達人講座も別にコンドームのつけ方を覚えましょうとかではなくて、そこで起きる人との関係性のことを考えないと本当の達人じゃないんですよっていうことも含めて、やっていたというのが当時一番最初がありました。

【岩室】でも一方で、コンドームだとか派手なこと言いながら、人と人がつながることが大事みたいな、えらい年寄りじみたことを言うのを聞いて、戸羽市長なんかはどう思われました？

【戸羽】こういう地方中の地方にいますとですね、人のつながりですべてが起こるし、すべて丸く収めるのも人のつながりなんですよ。一人一人がどうつながっていくかっていうことが街の力にもなってくるので、この病気のことにもまぢづくりにしても、人と人だというふうに思います。

【岩室】今は38といえば本当にバリバリのとこだと思うんですけど、亮平さんの話なんか聞いてどうだったんですか？そういうつながりとか。

【石川】結局ここにいるメンバーは、講演会を私たちが開いた、たった1つのことからここまで大きくなった、それがずっとつながってきた。それが人の縁という形で今でも切れなかった、これは地元で活動をしている私たちにとっては、大切にしていかなきゃいけないという風に思っています。

【岩室】確かに震災でAIDSのイベントは切れたんですけど、3.11の後連絡しても連絡がつかなくて、NHKに出てそれを北山さんと「亮平出てたよね」という話をしてメールが繋がったら「岩室先生、来てください」と言われたんです。忘れられないのは、この一中に大勢の方が避難されていて、その景色を見て「これは何かやらなきゃな」と思って、それから毎月入らせていただいているんで、実は途切れてない。つながりというのはずっと続くんだな、なんかそんな感じですよ。それをつないでる亮平さん、どうですか？





戸羽 太 陸前高田市市長

【佐々木】 たぶん震災前って、JCさんと保健所さんと高田市さんと「つながりが大事だよ」って言うても「そうだよ」みたいな感じで、あんまり…

【石川】 正直実感はない部分がありましたよね。

【岩室】 スローガンだけが独り歩きしてるような。

【佐々木】 それで、例えば言葉にすれば絆とか、元々は皆さんが感じて当然の、この「はまかだ」もそうですよね。当然のことなのかなとは思いますが、それを改めて皆さんと確認したいという意味では今日の日もすごくうれしいなと思います。

【岩室】 戸羽市長、震災の前と後でつながりっていうことに対する思いが変わったとあってあります？

【戸羽】 大きく変わりましたね。知り合いの数は何千といえると思うんです。でも、普段生活してる時にお付き合いしてる人はそんなたくさんはいらっしゃらないですよ。人のつながりは大事だということは意識はしてましたが、震災にあってから、全国世界中の皆さんから応援をいただいて、新しいつながりもいっぱいできた。復興した後も、そのつながりを持っていくことが子どもたちの明るい未来に必ずつながる、そして我々みたいな

に絶望を味わった人間を救い出してくれたのも、人のつながりだと思いますのでね。弱い立場になって初めてわかるのかもしれないですね。

【岩室】 弱い立場といえば北山さんもまさかのHIVをもらって、どのあたりから立ち直れた、そういうつながりとかの関係、いかがですか？

【北山】 本当に人の助けで生きてこられたかなって思っています。感染を告知された時は、感染したら必ずAIDSを発症して、数年後には亡くなるっていう、死の病だったんですね。途中で自分の命をあきらめようとしたこともあった。その時に自分を救ってくれたのは友達であったり職場の人であったり、その人たちの一言が私の気持ちを支えてくれた。本当に人とつながっていることで生きてこれたっていう気がしています。

【岩室】 陸前高田に来て話もされたんですけど、何で自分の病気を表に出して伝えるんですか？

【北山】 聞きたい人がいるからですかね。私は積極的に「私がこんな状況です」って言いたいわけではなくて、「話しませんか？」ってしてくれる人がいて、私に人の前で話をするチャンスを与える人たちがいるので、話している、それだけかもしれません。

【岩室】 亮平さんは彼女をどうして呼ぼうと思ったんですか？

【佐々木】 10年くらい前にさかのぼりますけども、当時はまだ「アールグレイ」さんだったんですよ、ペンネームで。その時にお話を聞きまして、すごく響いたわけですよ。当事者が語る言葉と担当者として語る言葉では、説得力も言葉の力も違うなっていうのはありましたので、これを皆さんと一緒に考えたいっていう、それだけです。

【岩室】 当事者の声っていう意味では、震災直後から戸羽市長がいろんな所に積極的に出て情報発信、Facebookを含めて、やってらっしゃいますけど、どんな思いで？

【戸羽】 国の方々に言っているのは「気持ちを共有してください」ということですね。こちらの表現力も足りないというのもあると思いますが、ここの気持ちを共有する、これはすべての部分だと思うんです、このHIVのことでもそうですけど、どう気持ちを共有してもらえるか、相手の立場に立てるか、立ってもらえるかが、お互いの理解を深められる、そして今できる最善の方向に行ける、そういう手段なんだと思いますけど、難しいですよ、これは。



【岩室】県外からいらっしゃった方も何人かいらっしゃると思うんですけど、景色を見てどうでした？テレビを通して見るのとは全く違いますよね。だから政治家も来なきゃだめ。それも来続けないとだめなのかなって、今の話うかがって思ったんですよ。

【戸羽】政治家にもですね、本当に一生懸命な人いますよ。そういう人たちに我々支えられてると思います、精神的にも。我々は本当にわらにもすがりたいような思いは今でもあってですね、私たちの復興計画って8年間なんですよ。今、高台の造成とかやっていますが、やられてしまった市街地なんかは、家が建てられる環境ができるのは平成30年とかなんですよ。そういう場所もあるということですね。ですから私たちとすれば1日も早くやるためにみんなで知恵を出し合ひましよう、ルールも変えてくださいって言うてるんですけど、なかなかそうはいかないんですよ。

【岩室】じゃ、今度は国会議事堂にこの「はまってけらいん、かだってけらいん」旗を持って歩きますか？（拍手）結構集まりそうですよ（笑）未来図会議っていうの毎月やってるんですが、この「はまってけらいん、かだってけらいん」っていう言葉は、その未来図会議の中で、心も元気にしなきゃいけないっていう思いで話し合ってたときに生まれたんですよ。

【佐々木】そうですね。すぐにはこれは出てきませんでした。皆さんそれぞれ頑張ってるんです、やってることは別々でしょうがないんだけど、何かみんな共通するものがあるんじゃないかっていうのをお話してたんですけど、それが何かはわからなかったんですよ。で、それをしゃべり続けることで、この言葉で言えば「はまってけらいん、かだってけらいん」なんですけど、参加して語りましょう、と。実は毎日の日常の中で自分は救われてる、助けられている、それが今はなくなってしまって、それぞれ居場所作りをしようっていうのも今未来図会議の中でもずっと話しているわけなんですけれども、言葉とすればここに繋がったのかなあとと思います。

【岩室】でも本当に亮平さんの、キャラ？北山さんなんか初めて会ったのはいつですか？

【北山】認識して会ったのは5年前ですよ。5年前のこのイベントの前の日の、ね？飲み会。

【岩室】どんな印象でした？

【北山】「なんだろうこの集まりは？」っていう感じでした。AIDSのイベントに呼ばれて来てるはずなんですけど、前日から飲み会が始まって、「いろんな人が仲良くやっているな」という感じ。でも私初めて会ったような気がしなかったっていうか、すごいみんなフレンドリーな感じだったので、初めてでも緊張感なく皆さんと仲良くなれたかなって気がしました。

【岩室】そこはJCの皆さんもそうだし、亮平さんなんか特にそれが顕著ですよ。でも、我々こうやって「はまってけらいん、かだってけらいん」の旗を作っても、なかなかこれ広がらないんですよ。どうしたらいいですかね？

【戸羽】市長室にもこれのちっちゃい版が置いてあります。私の部屋には1日に10人以上の方は、外からいらっしゃいますが、みんなまず目にして「これ何ですか？」っていうところまでは行くんです。でも標準語に直さないとかわかんないじゃないですか。これを説明するとだいたい5分ぐらいかかるんですよ（笑）やっぱり役所の力の入れ方が足りないですね。担当の人、いますか？（笑）これは、少なくとも岩手県内では一発で通じるくらいのものにしていかなきゃいけないですよ。

【岩室】そうですね。亮平さん、これはどうやって広げていきたいですか？もうこのイベント自体が「はまってけらいんかだってけらいん」じゃないですか、AIDSのイベント。



2008. 11. 23
5年前北山さんと初めて出会ったイベントの写真



【佐々木】わかりやすく話すと、交通安全運動とかあるじゃないですか。交通安全ってみんなわかっていることですよ。人を轢いちゃいけないとか、スピード出しちゃいけないとか、みんなわかっているのに掲げるわけですよ。それと主旨は同じかなと。皆さんで意識しようとしてるので、私はいつも旗をトランクに積んで、会う人会う人に押し付けです。

【岩室】でも、こういうことに関わり続けていると、つながりも広がるっていうのを実感させてもらっていて。私今マンションに住んでいるんですけど、マンションっていう呼び方嫌いで、高級長屋と呼んでいるんです。で、高級長屋の理事っていう当番が回ってくるじゃないですか。回ってきたときに、僕はすぐ手を挙げて理事長やります。で、条件を1つ付けます。「必ず理事会の後は飲み会やりましょうね」。そうすると、その飲み会が理事だけじゃなくて広がるんですよ。だから、ちょっとした意識で広がるような気がするんですけど。市長さんはこれからどんな仕掛けを？

【戸羽】今日はAIDSのフォーラムということでみんなに集まっていただけてますけど、この「はまってけらいん、かだつてけらいん」のフォーラムをですね、やりましょう。

【岩室】決まりました！

【戸羽】みんなちょっとした勇気なんだと思うんですよ。この旗を作った本来の主旨は、「これが立っているところは誰でも入っていいですよ」という目印だよってことですから、ちょっと入る勇気をみんなに持ってもらったらね、仲間の輪はもっと広がるし、そういう場があっちこっちにできれば広がっていくんじゃないですかね。

【岩室】男ってあんまりはまんないじゃないですか。でもJCの人たちよくしゃべりますよね。

【石川】そうですね。青年会議所って集まりは職種関係ないんですよ。全然関わり合いの無い仕事してたりするんですね。だからこそ、逆に自分の事をちゃんと紹介できないといけない部分もありますので、それが結果的に「はまってけらいん、かだつてけらいん」っていう場にもなっていく。そこがうまいこと噛み合っていけば、ワンステップ上のものができ上がったとか、このAIDSのイベントもその延長ですよ。

【岩室】今回JCさんの力でイベントが復活したんですけど、どんな思いで？理事長として。

【石川】このイベントが最初に始まった時から担当としてずっと携わっていたんですよ。それが震災を経て、こういう形で、震災前に関わっていた人たちがそのまま携わっている。これすごいよなって、思ったんですよ。Funny Pigが先ほどオープニングで歌ってくれましたけど、「ぼくらにできること」聞いた時、うるっときてしましまして。この会場で、この雰囲気の中で聞くっていうのが、すごい懐かしかったんですよ。

【岩室】「ぼくらにできること」っていう曲を、僕の話聞いて作ってくれたっていうのを知り、すごい感動しましたね。

【石川】私たちもびっくりしたんですよ。当時高校生ライブの出演者だった子たちが岩室先生の話聞いて、イベントの雰囲気を感じ、曲を作ってくれた。すごいことなんですよ。

【佐々木】「ぼくらにできること」も、「集うこと」とか「架け橋」とか、大人へのメッセージを若いお2人が発してくださって、私自身もうれしかったっていう記憶がありますね。



「はまってけらいん かだつてけらいん」卓上小旗
左側：陸前高田市デザイン
右側：岩手県大船渡保健所デザイン



【岩室】 そんなすごい思いで続いてきたイベント、実は横浜のAIDS文化フォーラム、京都のAIDS文化フォーラムがはまらせてもらったんですよ。市長さんはAIDSのイベントが復活するっていうのを、この復興がまだ大変だっている時期にどんな受け止め方をされました。

【戸羽】 「前からJCがやってるあのイベントが今回復活するんだな」くらいな気持ちだったんです。そしたらその規模が大きくなった形ですよ。冒頭に挨拶させていただいたように、「ノーマライゼーションという言葉の必要のない街を作る」というのは、日本に今そういう街がないと思っているんですね。それは、根本的に人間はみんな等しく生きる権利もあるし、みんな仲間だっているところをこの街で実現させたい。そういう街を目指している時にこれをしていただけたっていうのは、非常に意義があると思うし、もう一回その根本的なことを考えていただけるきっかけにならないかなあと思っています。

【岩室】 北山さん今の市長のお話を聞いてどう思いました？

【北山】 またここに来れたことがすごくうれしかったですし、一番に呼んでもらえたことをすごくうれしくなっています。本当にいい街になりそうな感じがします。素敵な言葉ですよ、ね、「ノーマライゼーションっていう言葉がいない」というのは、すごく私も期待したい。どこでもそういう風になればいいなと思っています。こういう病気を持ってしまって、友達に「病気になったけれども、あなたが変わったわけじゃないじゃないか」って言われたんです。多分、ここの皆さんも一緒かなあって。失ったものがあるかもしれない、無くした物があるかもしれない、けれどもあなた自身が変わってしまったわけじゃないと思うんですね。そういう皆さんと一緒に過ごす時間を持って嬉しいし、市長さんとお会いできてよかったと思います。

【戸羽】 ありがとうございます。本当に言葉が重いなと思います。被災して、家族を亡くされた方々も今日この会場にもいらっしゃっていますが、自分が変わったわけではないんですね。人の見る目が変わったり、生活環境が変わるということは当然あるんです。だからこそコミュニティがあったり、周りに仲間がいて、その人たちをお互いに支えあう。そういうのが本当は当たり前だったはずなのに、誤解が誤解を生んだり。例えば福島にいらっしゃって、原発被害にあって、どこかの県に移住したと、そしてお子さんを保育所幼稚園に入れようと思ったら、その子がいじめられたみたいな話が当たり前にあるじゃないですか。でもそれは、元々根底に誤解があって、自分の子供にうつたら大変だとか言っている人がいるわけですよ。だからそのために誤解を解く。そして、そういうことはいけないよっていう当たり前の事をみんなで認識し合うっていうことが、絶対的に大事だなって思いますよね。

【岩室】 HIVなんかでも、偏見だったり、無用な恐怖感を持ったり、それを時には人はいじめとかいろいろな形で表現してしまう。そうならないようにするには、北山さんなんか当事者として、これからこんなことがちょっと進むといいなとかって、何かありますか？

【北山】 私の話を聞いてくれた人は、HIVとかAIDSに対して、自分もなるかもしれない病気だったんだって思うと、差別とか偏見とかそんな気持ちはなくなっちゃうんですね。なので、やっぱり人と出会うこと。人と出会って話すとか、見て、感じて、何か伝わるっていうことが必ずあると思うんですね。私はそういうことをずっとやり続けられたらいいなと思っていますし、もう、そういうことが無くなるっていうのが一番いいなと思っています。

【岩室】 私もよく「支援に行ってるんですか？」って言われるんですけど、逆に支えられてるって感じることもすごくあって。やっぱりはまってかたり続けることが、お互いを支えているような気がするけど、亮平さんどうですか？



2008. 11. 23 STOP! AIDS in陸前高田のひとコマ
当時高校生だったFunny Pigの二人



【佐々木】その通りだと思いますね。言ってみれば不満だらけですよ、皆さんね、私含めて。そればかり言っていれば何も進まないんですけど、例えば月一回先生とお会いして、愚痴ではなくてお互いに言い合うことで、またそこから可能性とか力が生まれてくるので、やっぱり喋らないとだめですね。

【岩室】石川さんも、JC以外ではどんなところで喋っているんですか？

【石川】まず、会社ですよ。職員と喋ったりとか、お客さんと喋ったりとか。あと、消防団にも入ってますので、そういう場面。結局、集まる場所が点在しているというか、それがちょっとしんどい時もあるんですけど。でも、居場所だって感じられると、不安に思っている時とかに、人に喋れる。喋っただけで結論が出るわけではないんですけど、気持ちの上ですっきりするというか、そういうのがあるっていうのはとてもいいので続けています。

【岩室】震災直後から、全国から心のケアのサポーターの方が入ってこられて、その当初から亮平さんと2人で言い続けたのが「愚痴でもいいし何でもいいし、それをするだけで皆さんケアされるんですよ」と。気がつけばこういう言葉になって具現化されたような感じですよ。

【石川】私も今しんどいという形で表現しましたがけれども、ある種そこを楽しんでいる自分もあるんですよ。そこに行けば仲間がいるとか、そこに行けば愚痴を聞いてくれる友達がいるとか、そういうのも、同じことを喋っても聞く人が違えば、返してくる言葉も違いますので、それが「はまってけらいん、かだつてけらいん」の場面になっているんですね。

【岩室】そうやって、他の人はいろいろはまる場所、かだる場所がある気がするんですけど、市長っていう立場になるとあんまりはまってかだつて…

【戸羽】そんなことないです。2011年2月の選挙で当選させていただいて、1ヶ月も経たないでこういうふうになっちゃったので、ここは見栄張ったところでどうにもならないなって、思ったんですね。その時に、三重県の松阪市に山中っていう変わった市長がいて、彼が陸前高田に被災の後に来てくれたんですが、私は会ったわけじゃないんですね。落ち着いて少しして電話をしたら、5月5日に東京で陸前高田を応援するための集まりをやるから誰かよこしてくれと。

「じゃ、私が行きます」って行ったんですね。そしたら、山中さんとか、あとは佐賀県の武雄市という、変わった市長で樋渡さんっていう人がいるんですけど、そういう仲間とかがいっぱいいらっしゃって、いっぱい仲間ができたんですよ、全国に。でね、市役所の職員もたくさん亡くなって、私が住んでいた森の前という所でもたくさんの方が亡くなったんです。そういう人たちに対して我々は何ができるんだろうって、いつも考えます。その人たちを忘れないことと、もう一つは陸前高田という街を、震災の前よりもいい街にして、残念な思いで亡くなっていった人たちの気持ちにどう応えられるかなあっていつも思います。だけど見た目がカッコいいとかね、便利になったってのも大事ですけど、それ以上にその偏見とか、差別とか、そういうのが無い街ができれば、きっと天国にいるみんなも「よくやってくれた」って言ってくれるんだろうなって、私は真剣に思うんですね。だから、陸前高田っていう街であれば、障がいをもった方でも、おじいちゃんおばあちゃんでも、みんな笑顔になれるよっていう街を作りたいんです。（拍手）

だからこういうAIDSのフォーラムもここでやっていただくっていうことが、みんな相手の立場に立ってみようよ、っていうことが絶対大事だと思うんですよ。そういう意味で、大いにかだつて、大いにはまって、仲間を増やしていただいて、仲間が多いっていうことが必ず人生においてプラスになるんだってことを、改めてこの震災に教えてもらったなって思ってますね。

（拍手）



【岩室】市長さんに最後締めていただきましたけど、皆さんのお手元に陸前高田のチラシありますよね、そのチラシを作ったのは母袋さんっていう画伯なんですね。AIDS文化フォーラム in横浜をボランティアとして手伝ってくれています。その母袋さんと山中市長が友達だったんです。陸前高田にフォーラムが今年広がるんだって言ったら母袋さんが「じゃ、このチラシ作ります」って言ってやってくれて。はまって、かだり続ければ復興も、あるいはノーマライゼーションという言葉がいらない、HIV/AIDSなんていう話も出ない、でもちゃんと医療も受けられる、普通に生活できるそんな街ができていくんでしょね。そういう第一歩に、今日がなって、AIDSっていうことをここでやってよかったって市長さんに言われて、本当にやってよかったなど、改めて思いました。今日、登壇してくださった皆さんに、そして参加してくださった皆さんに拍手で最後お礼を申し上げて終わりたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）



<<感想(一部抜粋)>>

○フォーラムで市長の生の声が聞けて良かった。トークセッションは期待以上でとても良かった。岩室先生のコーディネーターはすばらしかった。

○いつも災害FMで岩村先生と佐々木先生のお話を聞いております。今日こうしてお話を聞いて感動しています。前のリプルでの催しのときも聞く事ができました。その当時保健課の課長さんだった菅野さんが今日この会場にもお見えになっていらっしやって、この陸前高田はずっとAIDSに真剣に取り組んでいることがうれしく思いました。

○HIV/エイズ対策の狭い考えから人と人とのつながりへともっと、もっと広く考えることができました。ありがとうございました。



4.HIV/AIDSミニ講座

地域医療振興協会 ヘルスプロモーション研究センター長 岩室紳也

「神様がくれたHIV」著者 北山 翔子

【感染の告知】

【岩室】 HIV(ヒト免疫不全ウイルス)に感染した後、昔は5年～10年で、今は1年でAIDS(後天性免疫不全症候群)っていう状態になり、肺炎を起こしたり、癌になったりして、昔はなくなる人が多い病気でした。北山さんがHIVに感染してるって分かったのは何年前ですか？

【北山】 17年くらい前、私は医療職のボランティアとしてアフリカに行っていたので、健康診断の一つとして抗体検査を受けました。

【岩室】 念のために検査をしましょうっていう感じだったんですか？

【北山】 そうですね。でも検査の結果がなかなか戻ってこなくて任期の終了3ヶ月くらい前に郵便で1通の封筒が届き、「あっ、やっと抗体検査の結果が来てたな」とすぐに封筒の中を開けてみたところ、結果通知書っていうのがあって、そこに、HIV抗体、HIV抗原っていうのがあったんですけども、その結果欄のところに(+)って書いてあった。

【岩室】 陽性、感染していたんですね。



「HIVに感染していますって事が、 紙一枚で知らされて・・・」

【感染を知って】

【北山】 HIVに感染していますって事が、紙一枚で知らされて、何が起きたかわからない。目の前が真っ白になって、もう本当、自分が死んでしまうんじゃないかっていうことを考えました。

【岩室】 1996年って言うとほとんど薬も無く、AIDSになったら死ぬっていう情報が、かなり浸透していた頃ですよ、

【北山】 そうですね、死の病の宣告のようでした。その後、自分がいつまで生きられるか知りたかったので、派遣前にもらっていたAIDSのパフレットを見て、いつまで生きられるのかが書いてないか探しました。書いてあったのが1/3の人が2～5年以内にAIDSを発症してなくなるとか、あとの1/3の人が10年くらいでAIDSは発症するという感じで…

【岩室】 カウンセラーさんに相談するとか、そういう状況でもない。

【北山】 そういう状況でもないし、でも、私もその病気になったっていうことを抱え切れなかったので、周りの人に「実はこういう病気になったんだけど、早く日本に帰らなくっちゃいけない」という話をしました。



【カミングアウト①(周りのスタッフに)】

【岩室】 それこそ“はまってかだつて”ですね。アフリカの周りの人たちってどんな反応だったんですか？

【北山】 一緒に仕事していたアフリカのスタッフは、「まあそういうこともあるよね」って。



あの人たちは本当に今日生きるか死ぬかっていう生活をしているので、死が割と身近なんです。一番私と仲がよかったスタッフのローズは「翔子、神様はね、あなたが乗り越えられるだけの苦労をお与えになるんだよ」って、言ってくれたんです。だからあなたはこれから日本に帰ってもこの病気をきつと乗り越えた行く人だ、だから大丈夫だって言ってくれました。

「神様は、あなたが、 乗り越えられるだけの苦労を与える」

【感染経路】

【岩室】 中学高校の教科書にはHIVの感染経路は血液、母子感染、性行為感染、と書いてあるんですけど、この書き方やめると20年近く言い続けてやっと、大修館書店が変えてくれました。なぜかと言うと、血液はHIVがいる場所です。母子感染は人間関係。SEXっていうのは行為。全部バラバラのことを指しています。だから行為で言えば、SEX、輸血、刺青、薬物の回し打ち。医療関係者だと針刺し事故。多くの人がうつるとしたらSEX位ですよ。

【北山】 そうですね。はい。

「大丈夫だよ僕がいるから」

【カミングアウト②（彼氏）】

【北山】 私が感染するとしたら当時付き合っていた彼からしかないと思いました。彼はすごく離れた所に住んでいたんですけど、すぐに会いに行って、「私がHIVに感染している」って伝えました。彼はその時に「大丈夫だよ僕がいるから」って、言ってくれたんです。

【岩室】 彼からうつったはずなのに、「大丈夫だよ僕がいるから」？

【北山】 私もびっくりして「大丈夫だよ僕がいるから」っていう言葉を聴いて、「あっ」て思ったんですけど、彼は自分が感染していると思っていなかったことに初めて気づいたのです。でもそれも当たり前なんですよ。

【岩室】 自分が感染していて、人にうつしたいって思う人って、いないですよ。

【北山】 いないです。私は彼を責めるような気持ちで、あなたからうつったっていうことを言いたかったのに、彼は知らなかったという事を聞いて、「ああ、この人は責められない、私も知らなかったんだし、知らなかった彼を責めるわけにはいかないな」って思いました。

【治療①（受診）】

【岩室】 日本に帰ってきて、まずは医者にかかったと思いますが、1990年代後半でもあまり、診てくれる先生いなかったと思うんですけど。

【北山】 事務局の診療所のドクターから紹介されたのが、薬害エイズの人たちも診ていた東京大学医科学研究所附属病院でした。私はすぐに入院しないといけないんじゃないかと思っていったんですけど、今の状態だと、薬も飲まなくていいし、入院もしなくていい。普通の生活を送ってくださいって言われたんです（笑）。

【岩室】 HIVに感染するとウイルスはCD4陽性リンパ球に住みつき、HIVの子孫を増やすために、CD4をどんどん破壊し、体の抵抗力、免疫力が下がります。アメリカでは200 (/μl) を切るとAIDS発症と診断します。当時の北山さんはどのくらいのCD4だったんですか？

【北山】 663 (/ml) 数字は忘れません(笑)

【岩室】 健康な人は1000くらいですが、600もあれば十分という状態で、治療はいりません。当時はCD4が200を切ると治療しましょうということになっていました。



【仕事の継続】

【北山】でも仕事もやめなくちゃいけないかなとか思って、先生に聞いたんですね。

【岩室】なんでまた、やめなきゃいけないって思ったんですか？

【北山】事務局の診療所のドクターが「あなた公務員でしょ」。「この病気の人が、公的な仕事をするのは僕はどうかと思う」と言われてきたので（笑）。

【岩室】とんでもない医者ですね。

【北山】悪気は無かったと思うんですけども、すごく悩みました。

【岩室】私の患者さんで看護師さんもいらっしゃるし、普通に仕事していただければいいわけだけれど。でも、普通っていっても検査や治療のためには東京まで通院しなきゃいけないでしょ？

【北山】私は関西に住んでいるんですけども、東京の病院まで、2、3ヶ月に1回通ってくればいって言われたので、2、3ヶ月に1回通っていました。

【岩室】でも病院に行くので休ませてくださいと職場には言いつらくなかったですか。

【北山】最初の頃は病気の事を職場の人に言っていなかったもので、こっそり、1日だけ休みをとって、日帰りで新幹線乗って、行ってました。ところが薬を飲まないといけなくなっただけですね。すると、月1回定期的に休まないといけない。実は私は保健師ですが、体力も落ちるし、1日の日帰りが辛いので1泊でと思うと、月2日コンスタントに休まないといけないということになって、職場の直属の保健師の上司に話をしました。

【カミングアウト③（職場上司）】

【岩室】たとえ保健師でも上司に言うって勇気が要りますよね。

【北山】かなり勇気が要りました。私が帰国するときに、同じボランティアの日本人のお友達が「翔子さんプロでしょ」って言ったんですよ。その言葉がずっとひっかかかっていて、私は保健師という予防活動をする立場でありながらこの病気であるって言うことがすごく辛かったです。「保健師なんてやっていいのだろうか」とずっと思っていたので、その同じ保健師のあの先輩の師長さんに言うのは辛かった。勇気が要りました。

【岩室】実際言ってみてどんな感じだったんですか。

【北山】当時の師長さんは私に、「今まで北山さんは黙ってたん辛かったですよ」って、言ってくれて、「でもね、仕事だけは絶対やめないで」って、言ってくれました。

【岩室】そう言われるとうれしいですよ。

【北山】うれしかったですね。彼女がそう言ってくれてなかったら、私はもしかしたら、今は保健師を辞めてたかもしれないなって、思いますね。



「仕事だけは絶対やめないで」

【カミングアウト④（家族）】

【岩室】ご両親はご健在ですよ。ご両親にはいつどんな感じでお話をされたんですか？

【北山】両親に話したのは、感染を知ってから3年後でした。治療をはじめた後で。きっかけは、私の失恋だったんです。その時にいろんな事考えてたんですよ。自分にとって、大切なことって何だろう、大切な人って誰だろうって思って。大切な人って思った時に、自分の両親だったんですね。その両親に私、本当のこと言えてない。やっぱり本当の事言わないとどギクシャクしてしまうと思って、両親に打ち明けました。



【岩室】ご両親の反応はどうだったんですか？

【北山】母親は絶対パニックになると思ってたんですよ。「アフリカに絶対、行くな」って言われていたのを押し切って行っていたので、後ろめたい気持ちもあったし、「母親にまた悲しい思いをさせる」、「辛い思いをさせるくらいならずっと言わないでおこう」って思っていたんですけども。母親は「体調はどうなの？」って聞いてくれたんですね。「体調は大丈夫だよ、お薬もあるし」って言ったら「ああ、それならいいけど」って。そんな感じでした、意外とあっさりだったんでびっくりした。

「言いたいことが言えて、 気持ちがすっきりしたやろ」

【岩室】お父さんはどうだったんですか？

【北山】今まで大切に育ててもらったのに、また心配掛けるようなことになってごめんなさいってという言葉がやっとその時に言えたんですね。その言葉を聞いて父親は、「あなたもこうやって、お父さんやお母さんに言いたいことが言えて、気持ちがすっきりしたやろ」と。

「まあ気持ちがすっきりしたら、これからは体に気をつけて頑張れ」って言ってくれました。

【岩室】お話を伺っていると、本当に、北山さんも、ローズさんと、彼と、職場の上司と、ご両親と“はまってかだつて”ご自身の辛いところ、不安に思ったところを一つひとつ解決されていったのですね。ところで治療の方はどうですか。

【治療②（現在の治療法）】

【北山】治療を始めた時は1日5回薬を飲み、空腹時でないといけないとダメな薬や、お水を1日に1.5リットル飲まなければならないとかいろんな制限が辛かったですが、今は1日1回4錠程です。

【岩室】1日1回って言う薬もあるんですが、それが合わない時は1日2回飲まなきゃいけないこともあります。飲み忘れていいのは20回に1回ぐらい。いいかげんな飲み方したり、食直後でなきゃいけないのに、食べるの忘れちゃって飲んだら、薬が効かない耐性ウイルスが増えるんですね。そういう意味ではうつらないにこしたことは無いわけですよ。ぜひ、今の北山さんの話をきいて、何かを感じ取っていただければなあと思いますけど。北山さんこうやって、治療を一生懸命やってるんですけど、今日主治医と久しぶりに会っているんですね。

【北山】そうですね（笑）、あの、私なぜか主治医とは年に数回しか最近会っていない感じがするんですけど、本当は毎月受診しているはずなんですけれど、久しぶりに会いました。

【岩室】北山さんの主治医が、このフロアに来ておられて。大阪医療センターの白阪先生、北山翔子さんの主治医です、関西地方では2600人を越える患者さんを御覧になって、我々がいつも頼りに教えていただいている先生です。

【はまかだ】

【岩室】HIV/AIDSと向き合って暮らしている北山さんもいろんな方との“はまかだ”で乗り越えて来られたのですね。ぜひまた、陸前高田ではまってかだりませんか？

【北山】そうですね、また来たいですね。

【岩室】是非またお会いしたいと思います。どうもありがとうございました。

【北山】ありがとうございました。



2008年11月23日

北山翔子さんからいただいたサインと
「神様がくれたHIV（初期のデザイン）」



5. 特別講演「夜回り先生 いのちの授業」

夜回り先生 水谷 修 先生



私は22年間、夜の世界を這い回ってきた人間です。世界の中で最も平和で安全なはずのこの国日本で、残念ながら関わった子供たち若者たちのうち7名が殺人の罪を犯しました。関わった子供たち若者たちのうち128名を心の病で自殺、事故死、病死、失いました。関わった若者たちのうち49名の尊い命を薬物ドラッグによって奪われました。

今から12年前、日本に全く新しいタイプの問題を抱える子供たちが多数存在することに気づきました。今から12年前九州の福岡の女子高で講演やったんです。終わったら1人の女の子が訪ねてきた。どう見ても僕の関わる子じゃない。髪の毛黒い、眉毛太い、すっぴん、ボタン上まで、スカート膝まで。その子は真っ当な格好しているんです。ソファに座らせたら泣き始めました。数分後に「先生助けて」腕まくったんです。無数の剃刀で切った跡、リストカットでした。「痛かったな。でもな、リストカットはお前が初めて。先生お前のために何ができるかちっともわからん。でもやめたいのかい？」って言ったら「うん」って言うんです。「わかった、先生勉強してみる。一緒に生きてみるか」この問題に取り組み始めました。そして愕然とした。私が日本中の夜の街を毎晩夜回りやってるそのまったく同じ時間、日本中の暗い部屋で、明日を見失い、自らを傷つけ死へと向かう、夜眠れない子供たちが多数存在することに気づいたからです。

私が今恐れていることがある。私にとって一番大事な皆さん方の世界、昼の世界に夜の世界がどんどん入り込んできてる気がする。夜の世界のイライラ、攻撃性、悲しみ。いじめにあったり不登校引きこもりになる子には共通した生育歴がある。幼い時にいやというほど自分の父さん母さんの喧嘩や悪口の言い合いや陰口を聞いている。絶対子供の前でやっちゃだめです。生き方は絶対言葉で教えるはいけない。お年寄りに優しい子にしたかったら、日々親自らがお年寄りに優しくするんです。正義を生きる子にしたかったら、我々大人が正義を生きるんです。道徳は教えるもんじゃない、我々が生きて見せるもんでしょ。しかもですよ、道徳壊れてんの大人ですよ。それを子供に壊れた大人が教えれますか？

人は認められる、評価されることの中で、明日を生きる力、自信、自己肯定感をもっていく。かつて先人は何と言いました？「子供は10褒めて1叱れ」と言ったじゃないですか。10褒める中で心の通い合いを作り、自信を持たせ、自己肯定感を持たせた上で、一ヶ所を指導していけ。でも今多くの先生や親は10叱って1も褒めない。これが子供たちから生きる力を奪ってるんじゃないんですか。

健全な肉体にしか健全な精神は宿らない。今の子供たちや皆さん方の生活。夜遅くまでメール、携帯電話いじって、ネットやって、ゲームやって、テレビ見て。朝なんか眠いの当たり前、イライラするじゃないですか。だから人をいじめる。今日本の親たちは、包丁より危険な携帯電話メールインターネットゲーム機を、何の管理も指導もないまま与えてる。ゆとり教育が失敗したんじゃないでしょ。作ったゆとりが携帯電話メールインターネットゲーム機に奪われたんじゃないでしょ。いくら詰め込み教育にしたって、根本的な解決にならん。使いこなすことのできない道具は人を奴隷にする。絶対子供たちを道具の奴隷にしてはいけないんです。



リストカットは今**100万人**を残念ながら超えました。リストカットしている子供見つけると大概の親や先生は止めます。絶対リストカットは素人が止めてはいけません。リストカットは死ぬためじゃない、生き残るためなんです。自分の価値を確認し直している、確認作業なんです。問題はなぜ切らざるを得ない状況までその子が追い込まれたのか。その原因を取り除かずに、リストカットだけを封印すると、その子の心は爆発するかしぼむかです。

当然リストカットは心の病ですから、発見されれば、心療内科、神経科、精神科の医師のもとに行くこととなります。ここからは僕の自分の責任で言わせていただく。残念ながら日本の精神医療、根本的に間違えています。日本の精神科医の**9割以上**は人殺し、殺人者です。薬だけしか使わない。なぜ眠れないのか、なぜ死にたいのか、なぜイライラするのか、根本的な原因を取り除くことなく、ただ薬だけを使う精神科医を、人殺しと呼んでなんで悪いんですか。

じゃあ、精神科医がダメならカウンセラー。残念ながら日本のカウンセラーは使い物になりません、それはなぜか。文学部系の心理学の中にカウンセラーを養成するコースを作ってしまった。大脳生理学も勉強しないカウンセラーが、どのように人を治療するんですか。結局は論理構成です。論理で物事を考えられる日本人なんて、日本国民の**2割から3割**ですよ。ほとんどの人は直感的に、感情的に生きてる。その人たちにとってカウンセリングという手法そのものが全く意味をなさない。根本的な間違いです。

じゃあカウンセラーもダメだとしたら、どんな方法があるのか。僕のはいわゆる非論理的方法です。心の病は身体から。病んでる子たち、病んだ人たちは、だいたい昼夜逆転ですよ。病んだ時、苦しい時、辛い時こそ太陽の下に出て、きちっと汗を流し疲れるんです。これが一番簡単な治療法だと私は考えます。もう**1つ**方法があります。宗教の力を借りるんです。神や仏を信じろと言うのではない。我々人間の文化を信じろ。我々は、先祖代々敬い尊んできたものを畏れる、畏怖する心を持っています。リストカッターは実は宗教施設では切れない。心の病のケアにそういうスピリチュアルな部分、使えるのではないかと思っています。実は人間はとっても弱い存在です。でもその弱い人間がどうも**20世紀**傲慢になってしまった。傲慢になって個人主義「自分は自分は」。で、**1人**になった瞬間に実はとっても寂しくて心を病むようになった。もっと根っこの部分で基本的なところに戻るんです。裸足で地面を歩くというのは実は生きる力を身体の中に蓄えてくれる。自然の中に溶け込み、自然を受け入れ生きなきゃならない。それが今問われている時代だと私は考えます。ぜひ皆さん、やってみてください。

さて、最後に、あそうだ、その前にそうだ決めた。皆さん方のご家庭の子供たちが**1日30個**は美しい言葉、優しい言葉、認めてもらえる、褒めてもらえる家庭作りやってくれませんか。「お前の笑顔は最高」「お前は宝物なんだよ」「お前は優しい子だね」「父さん頑張ってるからね」家庭の中を美しい、優しい言葉で満たすんです。叱っちゃいけないとは言わない。悪いことやったら叱らなきゃいけない。でも**30個**は美しい優しい言葉で満たしてやってください。子供というのは受けた優しさや愛が、語られた夢や希望が多ければ多いほど、非行・犯罪・心の病から遠ざかる。受けた優しさや愛が深ければ深いほど、非行・犯罪・心の病に入っても、その傷は浅いんです。



さて、僕にとって一番憎い敵は何かと言われたら、それは薬物ドラッグです。この薬物との戦いは今から22年前の4月6日に始まりました。港高校の入学式です。僕は校門で立っていました。1人のちびっちゃんガキが真横を通った。横通ってすぐシンナーの匂いが匂いました。「おい悪いな、お前アンパン吹いてんな」シンナーを吸うことを「アンパンを吹く」と言います。彼は正直だった。「おう、やってんよ」捕まえて夜10時、家まで送ってきました。びっくりした、6畳1間のゲタ履きアパート。そこでお母さんとたった2人で生きてました。小5の8月までは幸せだった。ところが8月にお母さんが病気で寝たきりになる。お金が一銭も入らない。生活保護という制度そのものを知らない。親戚もいなかった。このマサフミを助けたのが同じアパートに住んでいた谷口という男です。マサフミ、小6から谷口のバイクの後ろに乗って暴走始めるんです。そしてシンナーを覚えたんです。僕が捕まえた翌日僕のとこに謝りに来ました。「俺考えたんだけどよ、俺先生と一緒に暮らしたらシンナーやめれそうな気がする」うちで1週間10日一緒に暮らすんです。1週間から10日シンナーやめると必ずこう言うんです。「先生もう大丈夫だ。母ちゃん寂しがってるから帰るわ」でも帰った3日か4日後には、泣きながら電話が入るんです。「先生、ごめん、俺今シンナー、ラリってるー。気づいたらシンナー使っちゃった」って泣くんです。「もうしょうがないよ、マサフミ、やっちゃったもんは。一からやり直そうな」またうちで1週間10日完璧にやめる。帰せばまた使う。同じことを3ヶ月近く繰り返しました。そんな6月24日です。俺が研究室に行ったら、マサフミが待っていました。「悪いけどさ、俺先生じゃシンナー止めれねえ。この新聞『薬物を止められないのは依存症という病気で、病気は専門病院の専門医師の治療や、ダルクなどの自助グループの仲間の助けなしには止められない』って書いてある。これこれ、神奈川県立精神医療センター、芹が谷病院。連れてってくれよ」ムカっときた、頭にきたんです。「こんな可愛いがってるのに、なんで水谷じゃだめだって言うんだ」その日僕はあいつに冷たかった。なんと嘘ついて、あいつ追い払いました。「今日はな、山下公園の公開パトロール、今日は帰れ」真っ赤な嘘でした。あいつ寂しそうに振り返りながら歩いて行って、ただ一言「水谷先生、今日冷てえぞ」そう叫んで走って帰っていきました。あいつの最後の言葉です。そのわずか4時間後、自宅近くの公園で仲間2人とサヨナラシンナー、シンナーを吸いました。シンナーから来る幻覚、ダンプカーの灯りが何か美しいものに見えたんでしょう。両手で掴むようにして飛び込んで行って死にました。

2日後は通夜でした。翌日告別式が終わった後、お母さんから頼まれた。「火葬場まで一緒に行ってくれませんか？箸渡しする人がいないんです」お母さんとたった2人、火葬場まで行きました。見送って1時間ちょっとで台車に乗せられて戻ってきた。骨がほとんど残りませんでした。僕は惨いことをお母さんにしてしまった。「ほらここにお骨あります。箸渡ししてやりましょう」お母さんと2人、そーっとそーっと持ち上げたんです。でも空中でお骨が粉々に砕け散りました。その瞬間にお母さんが「うわー」って叫びました。もう何てことしてしまっただ。お母さんと僕と4つの手で、骨壺に灰を入れてました。



もう俺は教員やる資格ない、だめだ。研究室で自分の荷物をダンボールに入れてました。その時にマサフミが最後の日に置いていった新聞の切り抜きが目に入りました。まず芹が谷病院を訪ねました。院長先生、2時間にわたって話を聞いてくださいました。こう言われました。「水谷先生、あんたが殺したんだよ。薬物ドラッグをやめられないのは依存症という病気、あんたは病気を愛の力で救おうとした。病気は専門病院の専門医師の治療をもって治すものだろ」愛の力で勝てるわけが無いんです。私は一人の少年の死でそれを学ぶことになりました。

最後に命の話をして、お話終わりにします。今から7年前です、私は沖縄で連続講演をやっておりました。どうしてもお参りをしたい洞窟がありました。沖縄では洞窟の事をガマと言います。遺族の方と共に、そのガマのたった1ヶ所の入り口に、お参りをさせていただきました。そのガマには1945年、アメリカ軍による沖縄上陸作戦。23万を越える日本人の血が流され、しかもそのうちの13万があつてはならない沖縄県人、民間人だった。あのひどい悲しい戦いの時、そのガマの中には724人のおじいちゃんおばあちゃん父さん母さん、子ども達赤ちゃんが逃げ込みました。アメリカ軍は、そのガマのたった1ヶ所の入り口の前を通った。中から赤ちゃんの泣き声が聞こえたんです。彼らは問答無用で爆弾を放り込み、何十発もの手榴弾を投げ込み、火炎放射と機銃掃射を始めました。中にいた大人たちどうしたと思う？子供を洞窟の奥に集め、抱きしめ頭を撫で、1人また1人、その爆弾の上に身を投げた。2日後洞窟内に入ったアメリカ兵が救出してくれたのは、たった12名のおばあちゃんやお母さんのお腹の下で、虫の息になっていた赤ちゃんのみです。

子ども達覚えておきなさい、君達の先祖祖先誰か一人が子供を生まないで死んでいたら君達の命はないんです、君達の存在は無いんです。でもその命の糸を守るために長い人類の歴史の中で数え切れないほど多くの、おじいちゃんおばあちゃん父さん母さん子供までもが、命を捧げ守ってくれてるんです。この命の糸を絶やささないで、繋いで、だから子ども達、君たちは生きて生きて、生き抜くんです。そして君たちの命を次の命に繋ぐんです。これから先死にたくなったら、馬鹿やりたくなったら、切りたくなったら、思い出せ、あの広島長崎の原爆の炎の中で、どれだけ多くのおじいちゃんおばあちゃん父さん母さんが、せめてこの子の命はと、身を捨てて子ども達を守って散っていったか。その人たちの無念さを考えたら、愚かなことはできないはずです。

大人の方々に最後にお願ひがあります。今多くの大人の方々が僕の住む夜の世界、暗い夜の部屋で自らを傷つけ死へと向かったり、暗い通りをさまよったり、暴れる子を見て目を背ける。嫌う、憎む、恐れる、それどころか罰しようと思えする。でも皆さんに聞きたい、どの子が好き好んで、暗い部屋で自らを傷つけ死へ向かいますか？どの子が好き好んで、暗い通りさまよったり暴れますか？本当はどの子も、あつたかい父さん母さんのいるあつたかい家庭で、たくさんの愛の中で生きたい。夜の世界の子ども達は捨てられた子供たちです、捨ててるのは一体誰なんですか？覚えておいてください、子供は親を選ぶことができない。この陸前高田の子ども達は、陸前高田に生きるすべての大人達の明日の「夢」「宝物」「子供」なんじゃないですか？この地球上のすべての子供たちは、地球上に生きるすべて私たち大人の「子供」「夢」「希望」なんじゃないですか？その物の見方ができない限り、子ども達は救われなれないと思います。是非、多くの子ども達に優しさと愛をあげてやってください。受けた優しさや愛の数だけ、子ども達は明日を豊かにして生きてくれます。それをお願いしに今日は参りました。これで終わらせていただきます。今日はどうもありがとうございます。



(この講演録は録音データから主催者の編集により作成したものです)



6. 閉会挨拶

陸前高田青年会議所 理事長 石川 浩行

本日開催された「AIDS文化フォーラムin陸前高田」は、AIDSであることによって差別や偏見を受けることのない社会を構築することを学ぶ事を目的として2005年に当青年会議所の事業で講演会をおこなったことがきっかけとなり、その後毎年AIDS予防啓発イベントとして開催されてきました。

その中で、佐々木亮平先生、岩室紳也先生、北山翔子さん、さまざまな皆様との出会いがありました。そして、イベントを通してできた「つながり」は東日本大震災を経ても途切れることはなく、この「つながり」によって本年このイベントが復活・開催されました。

皆様にもさまざまな「つながり」がおありだと存じますがその「つながり」ひとつひとつがこの地域の復興・発展につながっていくものと考えます。本日の「AIDS文化フォーラムin陸前高田」によってできた新たな学びや気付き、そして新たな「つながり」がその一助となれば幸いです。

本日は最後までご参加いただきありがとうございました。



7. HIV即日検査

岩手県大船渡保健所実施

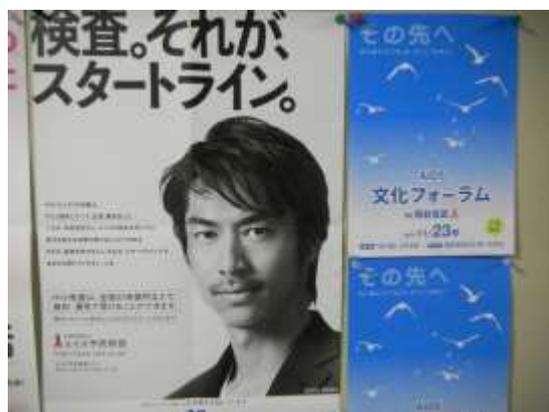
メインステージとは少し離れた一画で、HIV検査を希望する全員にプレカウンセリングを実施。

合計27名が検査相談に訪れました。

たくさんの方が検査を受け、エイズを他人事ではなく、自分のこととして、考えるきっかけとなりました。

全国の保健所で無料・匿名でHIV検査・相談を受けることができます。

(事前予約が必要な場合があります。事前に連絡してから受けましょう。)



参考：ACジャパン



保健所スタッフとボランティア高校生スタッフ



8. 気仙地域のエイズ予防普及啓発事業

☆平成17年12月18日(日) 陸前高田市ふれあいセンター

テーマ：「南三陸の中心で愛をうたう ～あなたとHIV・AIDSのつながりを考えよう～」

同年3月の陸前高田青年会議所定例会をキッカケに大船渡保健所と協働で企画。8月にAIDS文化フォーラムin横浜を視察し、事務局代表の大江浩氏を招いて勉強会を開催、青年会議所と保健所による実行委員会を設立。岩手県内初となる高校生のライブコンサートによる普及啓発を実施。故飯島愛さんから、このライブのためのビデオメッセージが届き、上映。ライブは7団体が発表し、173名の来場者があった。同時に南三陸地域では初めての試みとなるHIV抗体検査も実施。

☆平成18年11月23日(木・祝) 陸前高田市ふれあいセンター

テーマ：「STOP! AIDS! ～大切な人と生きるために～」

高校生から大学生、一般までライブパフォーマーを増やし、(12団体)、レッドリボンバンドや、チケット型チラシ(QRコード)による周知を試みると同時に東北地区初となる「THE BODY SHOP」によるブースを設置。岩室紳也先生による初めての講演会を開催する。来場者301名。

☆平成19年11月23日(金・祝) 陸前高田市ふれあいセンター

テーマ：「STOP! AIDS! in 陸前高田～レッドリボン知っていますか?～」

陸前高田市が新たに実行委員に加わり、地元高校との連携も進む。ライブでの啓発スタイルは継続し、ポスターコンクールを新たに実施。スタッフTシャツを作成し、高校生ボランティアスタッフも増加。岩室紳也先生による2年連続となる講演会を開催する。来場者262名。

☆平成20年11月23日(日・祝) 陸前高田ふれあいセンター

テーマ：「STOP! AIDS! in 陸前高田 ～ぼくらにできること～」

前年の岩室先生の講演後に、当時高校生だった市内在住の金野兄妹が「ぼくらにできること」を作詞・作曲し、テーマソングとしてDVDも配布。「神様がくれたHIV」の著者、北山翔子さんを招いての講演会を開催。アジアの女性と子どもネットワークによるAIDS孤児絵画展も東北初開催。

平成20年11月23日
高校生がイベントの運営主体を担って開催→
北山翔子さんを招く



☆平成21年11月29日(日) 高田松原ショッピングセンター・リブル

テーマ：「STOP! AIDS! IN KESEN ～KESENでぼくらにできること～」

市内ショッピングセンターのパブリックスペースを使って初開催。事前に1dayで終わらない取組みとして、地元4つの高校においてレッドリボンツリー&メッセージボードの作成・展示・発表を実施。「人と人のつながりを考える日」=12/1世界エイズデーを広く周知。

☆平成22年11月23日(火・祝)

高田松原ショッピングセンター・リブル

テーマ：「STOP! AIDS! IN KESEN
～伝えよう、レッドリボン～」

当時の陸前高田市中里市長と高校生によるトークセッション「高校生と中里市長が語るこれからのAIDS予防と人と人とのつながり」を実施。震災前最後の開催となる。

計6年連続実施。



☆平成23年度、平成24年度 東日本大震災・津波の影響により、
中断を余儀なくされる。

↑平成22年11月23日
震災直前のイベントの様子

平成25年11月23日(土・祝) 陸前高田市立第一中学校

AIDS文化フォーラム in陸前高田

その先へ ～共に進もう！「今」を、そして「未来」へ～

水谷修先生、陸前高田市長、岩室紳也先生、北山祥子さん、佐々木亮平先生等、県内外からたくさんの方々の御協力により、震災を乗り越えて事業を再開。講演会やトークセッションを開催し、来場者数251名。12団体との協働による展示、15,000枚のチラシ配布、来場者への昼食(カレー)提供等により、人と人とのつながりを意識したイベントとなった。

今年度のイベント開催までの経過

- | | | |
|----------|-------|--------------------------------|
| 関係者顔合わせ | 3月14日 | イベント開催日、会場、概算予算等話し合う。 |
| 第1回関係者会議 | 4月18日 | オープングライヴ、トークセッション、特別講演の実施が決定。 |
| 第2回関係者会議 | 5月16日 | 会場借用確定。昼食の提供を担ってくれる団体はないか話し合う。 |
| 第3回関係者会議 | 6月20日 | 開催チラシデザインを母袋さんが手がけてくださることが決定。 |
| 第4回関係者会議 | 7月18日 | イベントのメインテーマが決定。トークセッションテーマが決定。 |

AIDS文化フォーラム in横浜開催！

- | | | |
|----------|-------|--|
| 第5回関係者会議 | 8月7日 | ホームページ作成。岩手県立高田病院の石木幹人先生のつながりで、「財団法人 連帯 東北・西南」のタヘルさんを紹介いただく。 |
| 第6回関係者会議 | 9月12日 | 講師先生の前日当日スケジュールが決まり始める。 |
| 第7回関係者会議 | 9月27日 | 展示団体との調整を開始。 |

AIDS文化フォーラム in京都開催！

- | | | |
|----------|--------|--|
| 第8回関係者会議 | 11月1日 | 会場レイアウト等調整 |
| 第9回関係者会議 | 11月14日 | フォトジャーナリスト 安田 菜津紀さんと作品展の調整を行う。
前日・当日のスケジュールを最終確認。 |
| 最終下見 | 11月18日 | 陸前高田市立第一中学校の最終下見実施。 |
| イベント当日 | 11月23日 | 250名を越える参加者が来場。 |

反省会兼次年度打合せ 平成26年2月13日



9. イベントはまかだ団体

◆陸前高田市観光物産協会

復興グッズの販売と、市内の菓子店4店舗からの出品のご協力をいただいて、ブースを設置いたしました。

発売したばかりのピンバッチに人気があり、お菓子は早々に完売いたしました。

陸前高田市内は、仮設店舗で復活している店舗が多く、菓子店も例外ではありません。

これからも、市内の情報発信に尽力してまいります。



◆陸前高田「ハナミズキのみち」の会

避難路にハナミズキを植樹することを目的とする、会のご紹介ブースを設けました。

会場では、動画を使い活動のお知らせをさせていただき、賛同してくださる方からの署名をいただきました。

絵本「ハナミズキのみち」の販売もさせていただきました。

ご協力いただいた皆様、ありがとうございます。



◆HIVと共に生まれる--ウガンダのエイズ孤児たち-

初めてウガンダ共和国を訪れた2010年から3年の月日が経ちました。訪れる度に様々な問題、厳しい現実を目にしてきましたが、そんな中でも変わらず気がかりとなっているのは、国中で猛威を振るい続けているHIV/エイズ問題です。その犠牲の多さから、エイズは「音のない戦争」と呼ばれてきました。そしてその「戦争」の先には、犠牲になった人々の遺された家族の、深い苦しみが待ち受けています。

ウガンダ共和国では1982年にエイズ患者が確認されて以来、政治情勢の混乱も重なり爆発的に感染が拡大しました。その後1986年に就任したムセベニ大統領の指揮の下で進められた、国を挙げてのHIV/エイズ撲滅運動が功を奏し、結果1992年のHIV感染率が18%であったのに対し、2004年以降は5~6%台にまで減少しました。しかし、尚深刻な問題として国を苦しめているのが、エイズで親を失ったエイズ孤児問題です。国連の統計によると、片親もしくは両親を失ったウガンダ国内のエイズ孤児の数は120万人にもものぼるといいます。

首都カンパラのスラム街や、トラックドライバーが集まる街の売春街。HIV感染を理由に中々定職に就けず、体調も安定しない人々がここに集まってきました。「一番恐れなければならぬのは病気ではないよ。この病気で、希望を失うことなんだ」。親をエイズで亡くし、スラムで暮らす13歳の少年、レーガンがうつむきながらそうつぶやきました。母子感染で自らHIVに感染しているというだけで、幼いころから周囲の偏見と差別に苦しんできたといえます。

現在では医療技術の発達に伴って、HIVに感染しても、適切な投薬を受けることによりエイズの発症を極力抑えることが可能となりました。母子感染のリスクも、帝王切開や投薬、生後の授乳方法の工夫などによりかなり下げることが可能です。しかし現実には、汚職による社会不安や貧困、グローバル社会における経済格差といった問題が感染者の前に立ちはだかり、救えたはずの命がまたひとつ、またひとつと失われていきます。“救えたはずの命が救えない”、これ以上理不尽なことなどないのではないのでしょうか。

HIV/エイズによって愛する家族を奪われた子どもたちの過ごす日常は、闘いのような毎日です。それでも生き抜く彼らの姿を、写真でそっと見つめました。

安田葉津紀 (やすだ・なつき) 氏 プロフィール

1987年神奈川県生まれ。上智大学卒。Studio AFTERMODE所属フォトジャーナリスト。

16歳の時、「国境なき子どもたち」友情レポーターとして、カンボジアで貧困にさらされる子どもたちを取材。現在、カンボジアを中心に、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で、貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。2012年、「HIVと共に生まれる -ウガンダのエイズ孤児たち-」で、第8回名取洋之助写真賞受賞。共著に『アジア×カメラ「正解」のない旅へ』（第三書館）、『ファインダー越しの3. 1 1』（原書房）。



◆AIDS文化フォーラム in横浜

「AIDS文化フォーラム in横浜」は、1994年、横浜で開催された国際エイズ会議をきっかけに市民の手で、市民のために始まったフォーラムです。「感染経路を問わず、AIDSとそれを取り巻く状況を、多様に、文化の視点で考えていく」を特徴に20年歩み続けています。横浜から京都、そして陸前高田へと広がるAIDS文化フォーラムのアピールを行いました。

- ❧ 「これまでの20年みんなの声」パネル展
- ❧ 横浜-京都-陸前高田 共通 開催記念バッチの配布
- ❧ 「第20回AIDS文化フォーラム in横浜報告書」の配布
- ❧ 第20回開催記念クリアファイルの配布
- ❧ 2014年8月 第21回AIDS文化フォーラム in横浜 開催チラシの配布



❧ 横浜、京都、陸前高田と3会場の連携事業開催にあたり、エイズ予防財団助成金により実施することができました。心より感謝申し上げます。

【 広がるAIDS文化フォーラム 】

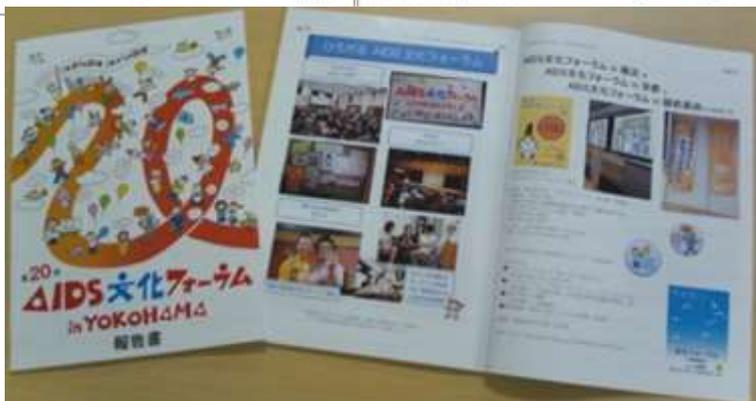
- 1994年 8月 AIDS文化フォーラム in横浜スタート。その後毎年8月に開催
- 2011年 8月 第18回 AIDS文化フォーラム in横浜開催
- 10月 AIDS文化フォーラム in京都スタート。その後毎年10月に開催
- 2013年 8月 第20回 AIDS文化フォーラム in横浜開催
- 10月 第3回 AIDS文化フォーラム in京都開催
- 11月 AIDS文化フォーラム in陸前高田開催



記念バッチ



次回8月1日～3日に開催します！



全国にひろがるAIDS文化フォーラム特集を組んだ報告書を配布しました。



横浜、陸前高田、京都 の連携。それぞれが陸前高田に集合しました！



◆AIDS文化フォーラム in京都

AIDS文化フォーラム in京都は運営委員会が主催、京都府・京都市が共催で開催しています。
 第1回2011年8月と10月花園大学と龍谷大学（来場者数約1,000人）
 第2回2012年10月同志社大学（来場者数約1,000人）
 第3回2013年10月同志社大学（来場者数約1,200人）で開催しました。
 開催の状況を、ポスター、プログラム、報告書を展示し、開催状況を報告しました。

AIDS文化フォーラムin京都の目的

- HIV陽性者が生きやすい社会を作る
 ～HIV/AIDSの理解
- HIV/AIDSの予防啓発

テーマ：
エイスを知ろう、エイスで学ぼう！



横浜の、応援と、具体的なバックアップがあり、
2011年8月第1回目を開催しました。

マスコミネットワーク
ひだまり

なぜAIDS文化フォーラムなのか

- HIV感染症はウイルスによって起こる病気です。病気だから医学や医療、社会福祉の領域だけで語られるだけでいいのでしょうか。
- HIV陽性者を病気と共に生きているひとりの人間としていろいろな領域からとらえ、理解する必要があります。
- 誰もが人として日常生活ではいろいろな領域に関わって生きています。そのことを文化としてとらえ、『AIDS文化フォーラム』と銘打っています。
- フォーラムのプログラムが多様なのは、こうした文化の中に生活している人の問題として考えた証しです。



京都、陸前高田、横浜がつながりました！



テーマ曲 ひだまりの場所

作詞：井筒日美・江藤天音
 作曲：江藤天音

<p>言葉じゃうまく言えなくて 涙と一緒に飲み込んだ こんなにそばにいるのにね 星よりもずっと強かった</p> <p>打ち明けてすべて失くしてしまっても 自分への嘘で泣くよりいいだろう ずっとそばで逃げたくない 満ちることのない月よ</p> <p>そっと傷ついた心に やさしく触れ ありのままの 僕を解き放つ君は どんなずぶめれの僕でも あのひだまりのように包んでくれる</p> <p>心が呼びだしそうで 消せない願いがあふれ出す 孤独な心と体は 自分で自分を許せない</p> <p>現実の壁に押し返されても 自分の心には まっすぐ生きよう はがゆくてもあきらめない 満ちることのない月よ</p>	<p>きっと踏み出していけるよ ずっとそばに 変わらないで いてくれたから 僕は やっと自分を愛せるよ あのひだまりのような君のそばで</p> <p>打ち明けてすべて失くしてしまっても 自分への嘘で泣くよりいいだろう ずっとそばで逃げたくない 満ちることのない月よ</p> <p>そっと傷ついた心に やさしく触れ ありのままの 僕を解き放つ君は どんなずぶめれの僕でも あのひだまりのように包んでくれる</p>
--	--



◆財団法人 連帯 東北・西南



本格チキンカレーを来場者全員へ提供しました！！

←評議員のタヘルさん。以前日本で生活していたこともあり、震災後、復興のために活動しています。「ボクはイスラム教徒だけど、宗教とか関係なく、人として、復興の支援をしたいと思ってパキスタンからきました。」とのこと。国籍も宗教も超えて、復興に尽力される姿に感動しました。

岩手県立高田病院の石木幹人先生とのつながりで、「財団法人 連帯 東北・西南」と“はまる”ことが出来ました。

当日は朝の8時から会場でカレー作りを行い、先着200食のところでしたが、トマトベースのチキンカレーを参加者の皆様全員に

○参加者アンケートより

- ・昼食のカレーがとてもおいしかった。
- ・素晴らしかったです。カレーおいしかった。



◆アーニ出版 性を語る会



3.11大地震・津波にもめげず「AIDS文化フォーラムin陸前高田」を開催されたことに敬意を表します。

アーニ出版は今年で45周年を迎えます。性教育専門の出版社として性・エイズ・薬物乱用防止などの教材やDVD、絵本を製作出版してまいりました。それらは日本全国の学校で幅広く活用されています。

今回、教材を展示したいとの要請がありましたので、上の写真のように広いスペースをお借りして、情熱をこめて展示しました。



◆メモリアル・キルト・ジャパン(MQJ)

HIV感染症・AIDSという病とともに生き、亡くなった人々に、その存在を「決して忘れない」との思いから、人1人分の大きさ(90cm×180cm)の布に、亡くなった人を愛した人たち(家族や友人、知人)が、その人を想い、語り合う時間を共有しながら作られたキルト。それがAIDSメモリアルキルトです。

陸前高田でAIDSメモリアルキルト展を開催することができ、訪れてくれた人々が、その一枚一枚に思いが込められたキルトたちと出会うことにより、多くの失われた命のことを想い、語り合う時間ができたのであれば、幸いです



◆カトリック中央協議会HIV/AIDSデスク

1995年からHIV/エイズ啓発活動を行い、勉強会の開催やフォーラムへの参加等を行っています。

小冊子、啓発ポスター、HIV/エイズ相談電話が書かれているミニカードを配布しました。

また、オリジナルのレッドリボンのキーホルダーを御紹介しました。常に身に着けていることで、意識できる、話題にできる、偏見の壁を取り除けると 생각합니다。HIV/エイズの予防は、忘れずに意識していることです。

イベントを通した「人と人とのつながり」が、震災前と変わらず続いていることが安心できることではないかと思えます。

規模などの変化はあると思いますが、以前と同じイベントが、こうして全国で行なわれているイベントのひとつとして復活したというのは、とても励まされることではないかなと思いました。そのお役に立てたなら、うれしいです。 坪井奈穂美

HIVやエイズという言葉は知っていても、それは知識だけであって、周囲での取り組みや個人の話を聞く機会や経験はありませんでした。

薬害エイズの問題も知っていましたが、でも私とは遠い話、差別的な自分が露呈します。

HIVとエイズの違いも微妙な私ですが、変なプライドが邪魔をして正しい知識を理解しようとしませんでした。今は理解できますが、では、その知識をどう活かせばいいのでしょうか。私たちはどう取り組めばいいのでしょうか。大きな課題です。

いろいろな取り組み方はありますが、エイズについて語り合うことでしょうか。

「どうしてそうなった」と原因を探ることよりも、「どう治療するか」を考えること。

「あなたは1人ではない」と寄り添うことではないでしょうか。村谷正人牧師

連絡先：カトリック中央協議会 社会福音化推進部 HIV/AIDSデスク

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館

TEL: 03-5632-4413 FAX: 03-5632-4461 E-mail: hiv aids@cbcj.catholic.jp



◆アジアの女性と子供ネットワーク



「アジアの女性と子どもネットワーク」はタイの北部に住む山岳民族の教育支援を中心に、アジアの中でも抑圧された立場にある女性や子どものいのちと権利を守る活動をしています。タイ北部には約100万人を超える山岳民族が住んでいます。それぞれに違った言語、文化を持ち、昔からの風習を守りながら暮らしていますが近年、貨幣経済の拡大や国の定住政策、気候変動などによ伝統的な暮らしを維持することが難しくなりました。土地を持っていないために自給自足が出来ず貧困から脱出することも困難です。これらの人々はH I V / A I D S感染のリスクも高くなります。

このような山岳民族の子どもたちに教育の場を提供し、教育により生活を向上させていけるようにとの願いのもとに、これまでにタイ北部、東北部などに10校の学校を建設しました。現在約3500人の9子どもたちがそこで学んでいます。

加えてA I D S孤児の支援、ストリートチルドレンの保護施設への給食支援と、ストリートチルドレンの子どもたちが自立していけるようにとの願いをこめた養蚕プロジェクトをタイ北部で実施しています。

今回A I D S文化フォーラム in 陸前高田ではA I D S孤児の絵画を多くの方々に見ていただくことができました。



◆PLANET(HIVとともに生きる会)

初めて陸前高田へ行かせていただきました。震災後に被災地を訪れたのは2度めです。

今回のAIDS文化フォーラム in陸前高田立ち上げへの参加を、横浜フォーラム参加の時に知り、声をかけていただきました。陸前高田のすばらしい自然環境に感慨を持って接してきました。フォーラム前日、京都から東京経由で気仙沼までの旅は初めてでしたが、気仙沼で九州から来られた同行の大野先生と出会い、安心して1日目を終えることが、当日朝、他の3名の方共々できました。

次の日、陸前高田に向かうバスの中から見、美しい海岸線と自然環境に感動しながら、ところどころにある、震災時の津波の被災地域の表示に気がつきました。被災時のすさまじい状況を感じながら車窓を見ていました。会場の第一中学にやっとたどり着きましたが、展示場所にはもうすでに、事前に送っていた展示物が張られていて、作業が短縮されて助かりました。ありがとうございました。

私たちPLANET(HIVとともに生きる会)は京都で、1992年から活動を開始しております。ちょうど薬害エイズから始まる日本のエイズ問題が浮上し、エイズパニックの時代からの活動になります。年間を通じて毎月1~2回の会合を持っています。今回の展示では、メインの活動である、エイズキャンドルパレードの宣伝チラシを年代を追って掲示させていただきました。また、掲示だけでなく、参加者にクイズをしていただくという取り組みをしました。クイズの内容は① HIV/AIDSは保健所で匿名で受けられます。はい・いいえ。 ② 日本の社会ではHIV陽性者は増えている。はい・いいえ。でした。約30名の方に参加していただきました。ご協力いただいた方々には、グッズを手渡しました。啓発用冊子2種(京都市、エイズ予防財団)、コンドーム、インスタントの甘酒。

また、会場の第一中学校の校庭には、初期に出来た仮設住宅があり、たくさんの方が暮らしておられるようでした会場にも参加されて、親しく話をさせていただきました。他の展示の方からの情報を聞きつけて体育館に来られていました。少しの時間ではありますが、交流できたことは良かったです。会場での地元の方や他の展示関係者との交流もでき、陸前高田ならではの取り組みとなりました。運営委員の方におねがいして、第21回エイズキャンドルパレードの実施状況をDVRで見ただけできるよう、準備していただきました。ご協力ありがとうございました。昼食も美味しくいただきました。



◆陸前高田復興の様子

陸前高田復興の様子を写真やスライドショーで紹介しました。

右の写真は日本百景、日本の渚100選にも選ばれていた白砂青松の「高田松原」と中心市街地の様子です。



2010.3.14 撮影：岩手県

あの日、15:33には市役所が冠水、浸水高は17mあまり、市内中心市街地の86%が浸水（壊滅）し、被害戸数は3300戸以上、死者行方不明者は1800人にものぼりました。



2011.3.29 撮影：岩手県



2013.3.12 撮影：岩手県



2012年9月に伐採され、2013年7月に保存処理が完了した「奇跡の一本松」は復旧・復興のシンボルとして現地の支えとなっています。

2014.2.7 撮影 佐々木 亮平 氏

国内外の数え切れない方々から、経済的・物的・精神的にも多大なご支援をいただきました。心から感謝申し上げます。

陸前高田では一人ひとりが安心して生活できる「居場所づくり」、「地域づくり」、「健康づくり」を目指しています。



◆日本赤十字社京都府支部 青年赤十字奉仕団

青年赤十字奉仕団の HIV 予防啓発について

- 青年赤十字奉仕団は、日本赤十字社のユースのボランティアグループです。
- 2010年より、活動の一環として、HIV 予防啓発をピア・エデュケーションの形で行っています。



マスコットキャラクター
レオンで～♪

ピア・エデュケーションって!?

同じ立場
年齢・価値観が同じ

教育

年齢や立ち場などが近い者同士で学び合うというものです

ピア・エデュケーションは今、日本だけでなく、海外でもHIV/AIDSや性感染症の予防を呼びかけるための手法として注目されているんだ!



みんな楽しそう!

恋愛上手の条件、知ってる!?

実は、恋愛上手の条件って、HIVやその他の性感染症を予防するためにも、とっても重要なんです!

HIV 感染を予防するには

きちんと **予防法を知っておく** 必要があります!

でも恋愛ってひとりでするんじゃないって、相手がいるよね!

だから、どれだけ正しい知識を持ってても、

コミュニケーション がとれないとさその知識、使えないかも!

せっかく知ってたのに使えなくて

感嘆しちゃうとか **残念** すぎませんか? ㄟ(・_・)!!!

そうならないために!
日赤ピアのプログラムを紹介するよ!!



日赤ピア・エデュケーションプログラム

※ 対象は15歳～20代の若者

【第一部】

HIV・エイズの予防基礎知識

- ① クイズ(グループワーク)
- ② スライドを用いた解説
- ③ コンドームの紹介

【第二部】

コミュニケーションについて

- ④ 基礎知識を活用するために(グループワーク)
～言いにくいことを伝える工夫～

予防に必要な知識を学ぶだけで終わらず、
コミュニケーションスキルを身につけることで
いざというときに「使える知識」を習得します。

知識

+

コミュニケーション
スキル

↓

使える
知識

日本赤十字社では2010年より ピアリーダーを養成しています!

ピアリーダー養成研修会

- ★ 対象は日本全国の青年赤十字奉仕団員
- ★ 毎年7月に西日本、8月に東日本の会場で開催
- ★ HIV/AIDS基礎知識、ヒューマンセクシュアリティ、ピア・エデュケーションの実践について学んだ参加者に修了証を発行

マニュアル作成

- ★ 若者、医師、保健師、大学教員らにより平成21年度に作成
- ★ ピア・エデュケーションの方法論も記載
- ★ 使用するスライドなどが入ったCD-ROM付き
(マニュアルは手にとってご覧いただけますが、持ち出しはご遠慮ください)

研修を修了したピアリーダーが、日本全国で活動を展開中!!



当日は岩手県のイーハトーブ奉仕団の藤原和美さんと、高坂葵さんが参加し展示の前で、来場者の皆様のご質問に答えていました。



10. マスメディア掲載等

東芝レグザ PREMIUM TIME
 福山雅治のオールナイトニッポンサタデースペシャル
魂のラジオ
 Onair Time 23:30-25:00 [Sat]

平成25年12月7日放送の中に岩室紳也先生が出演し、AIDS文化フォーラム in陸前高田についても触れていただきました。画像は陸前高田市と陸前高田青年会議所への応援メッセージです。

NPO法人A i d TAKATA

陸前高田災害FM80.5MHz

にてトークセッション、HIV/AIDSミニ講座、特別講演「夜回り先生 いのちの授業」が放送されました。放送の様子はコチラ
<http://www.koshu-eisei.net/saigai/abfrikutaka.html>

また、ブログ

<http://rikuzentakata-fm.blogspot.jp/>内にも御紹介いただいています。

応援メッセージの画像はブログ内に掲載。



岩手日報H25.11.24記事→

夜回り先生 愛情説く

陸前高田でフォーラム

パネル展示やトークセッションなどでエイズへの理解を深める「AIDS文化フォーラム in 陸前高田」(陸前高田青年会議所など主催)は23日、陸前高田市の一中で開かれた。「夜回り先生」として知られる元高校教師の水谷修さんが講演し、命と子どもたちに愛情を持って接する大切さを説いた。

市民ら約140人が参加。水谷さんは、非行に苦しむ少年少女と向き合ってきた経験から、薬物依存や自傷行為などの問題と、その背景にある社会や制度の課題を指摘した。戦争の犠牲者に触れ「あなたたちの命は無念の死を遂げざるを得なかった多くの人から



「子どもたちは受けた優しさの分だけ明日を豊かに生きる」と話す水谷修さん

託された命。命の糸を絶やさないと訴え、見守る大人には「子どもは親も時代も環境も選べない。陸前高田の子どもは大人の夢。子どもたちは受けた優しさの分だけ豊かに生きるの分だけ豊かに生きて」と伝えた。イベントは東日本大地震で休止し、3年ぶりに開催した。

○チラシ配布数
 約15,000枚



正しい知識身につけて

AIDS文化フォーラム

陸前高田



陸前高田市の高田第一中学校で23日に「AIDS文化フォーラム in 陸前高田」が開催された。同市のFunny Pigによるオーブンライブ「ほく

らにできること」に始まり、トークセッション、ミニ講座などが開かれ、市民らがエイズについて理解を深めた。全世界に3400万人の感染者がいるとされ、日本でも広がりをみせるエイズについて、正しい知識を伝える予防を啓発するフォーラム。「その先へ」共同して「未来へ」をテーマに(出陣)陸前高田青年会議所と陸前高田市、大船渡保健所が主催した。

この日はヘルスプロモーション研究センターの岩室伸也センター長をコーディネーターに、「神棟がくれた日記」著者の北山翔子さん、戸羽太市長、青年会議所の石川浩行理事長、岩手医科大東北メディカルメガバンクエイズに関連しさまざまな方向性からトークセッション 高田一中

機構特命助教の佐々木亮平さんがトークセッションを行った。この中で戸羽市長は「間違った情報が偏見として広がってしまった。正しい知識を得たうえで、予防や患者との接し方を考えていかねば」と発言。岩室センター長は「HIVの感染者と握手したとき、思わずパニックになってしまった。そんなことで移るはずないと分かっていたはずなのに」と自らの反省体験を振り返った。

恋人から感染したという北山さんは「まったく普通の青年で、彼は大丈夫、感染するはずがない」と思い込んでいた」と語り、エイズは他人ごとではないと強調。参加者には検

診が気軽なものであることや匿名性が守られることを訴えた。会場には、フォトジャーナリスト・安田菜津紀さんによるウガンダのエイズ孤児の写真展をはじめ、さまざまな団体がHIVや予防に関連した資料を展示。午後は「夜回り先生」として知られる水谷修さんの特別講演「いのちの授業」が行われたほか、HIVの即日検査なども実施された。

平成25年11月23日 東海新報
資料配布数215部
スタッフも加えると約250名の参加がありました。
参考：陸前高田市人口20,565人(平成25年11月30日現在)

11. アンケート

- これからも続けてください。「はまってけらいん、かだつてけらいん」が少しづつ1人ひとりのあいだに拡がっていくことを願っています。
- HIV/エイズ対策の狭い考えから人と人とのつながりへともっと、もっと広く考えることができました。ありがとうございました。
- 内容の濃いフォーラムで時間が短く感じられました。「命」「次世代へ」復興と共にこれからの陸前高田市の為にとっても必要なイベントだと思いました。
- いつも災害FMで岩室先生と佐々木先生のお話を聞いております。今日こうしてお話を聞いて感動しています。前のリプルでの催しのときも聞く事ができました。
- その当時健康推進課の課長さんだった菅野さんが会場にもお見えになっていらっしやって、陸前高田はずっとAIDSに真剣に取り組んでいることがうれしく思いました。水谷先生の講演は大変魂をゆさぶられました。まず自分の家庭から愛あふれる優しい言葉でいっぱいしていきたいと思ひます。ありがとうございました。
- 文化フォーラムが東北で行なわれるとのことで、仙台から参加しました。HIV/AIDS担当者として、仙台でも行いたいと思ひます。ここまでの、今日までのつながりすばらしいです。
- ・・・等、多くの御感想をいただきました。



AIDS文化フォーラム in 横浜(H26.8.1・2・3)

AIDS文化フォーラム in 京都(H26.10.4・5)

AIDS文化フォーラム in 陸前高田(H26.11.23)

AIDS文化フォーラム in 佐賀(H27.2.21・22)



●主催●

社団法人陸前高田青年会議所、陸前高田市、岩手県大船渡保健所

●後援●

大船渡市、住田町、大船渡市教育委員会、陸前高田市教育委員会、住田町教育委員会、
岩手県立大船渡病院、岩手県立高田病院、医療法人希望会希望ヶ丘病院、一般社団法人気仙医師会、
公益社団法人岩手県看護協会大船渡支部、(株)東海新報社、岩手日報社、NHK盛岡放送局、
IBC岩手放送、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、特定非営利活動法人気仙まちの保健室、
FMねまらいん、NPO法人 AidTAKATA陸前高田さいがいFM80.5MHz、(財)連帯 東北・西南

●助成金●

公益財団法人公益財団法人エイズ予防財団(平成25年度エイズ予防財団助成事業)
公益社団法人日本青年会議所(JAYCEEの絆応援団)

●スペシャルサンクス●

参加くださった皆様、陸前高田市立第一中学校様、母袋秀典様、白阪琢磨様、柴田建設様、木島知草様、
高田ミュージックサークル様、community center ZEL様、Community Action 様、気仙沼保健所長様、山中光茂松阪市
長様、樋渡啓祐武雄市長様、今野隆子様、全国青年市長会様、陸前高田市復興応援センター様等

平成25年度AIDS文化フォーラム in 陸前高田報告書

発行日 平成26年3月

編集 一般社団法人陸前高田青年会議所(岩手県陸前高田市高田町字中田43番地2号)
陸前高田市役所(岩手県陸前高田市高田町字鳴石42番地5号)
岩手県大船渡保健所(岩手県大船渡市猪川町字前田6番地1号)